
生かし屋キラー

活字の錬金術師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生かし屋キラー

【Nコード】

N8247Y

【作者名】

活字の錬金術師

【あらすじ】

一人・・・二人・・・三人・・・この世に死ぬ人がいるように生まれる命もある

この物語は人を殺さない殺し屋の話である

ムウーウ（前書き）

この物語は自分が描いた漫画の読み切りをすこしイジリ、小説にしたものです。あまり長くはやらないので
少しの間だけ おつきあい下さい

ムウーウ

一人・・・二人・・・三人・・・この世に死ぬ人がいるように
生まれる命もある

この物語は人を殺さない殺し屋の話である

エピソードグー依頼

「じゃあな」「また明日」「おう！仕事がんばれ！」

飲み会が終わり店から出てくる男たちの声が響く

「里田武か・・・」

突然空から声がした

里田武と呼ばれた男はふと上を見上げる

ビルに立っている男が目にはいった・・・

「殺し屋キラー執行！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

時はさかのぼる・・・

ボリッボリッ　せんべいをかじる音がきこえる建物

そこには『キラーン家』と書いてある布がぶらさがっている

ザーザッザザーッ　ゴゴゴゴゴー！

ちょうど台風の来る時期であった

ガラッ！！！！キラーン家とかかれた建物の戸が開かれる

「いらっしやい・・・なんかあんの？」

ゴロロロロッロ！

戸をあけた男の後ろで雷が鳴る

「殺してほしいんだ・・・」

「里田を・・・アイツを！！！！！」

「アイツのせいで！！アイツのせいで俺の会社はZONYとの交渉
が・・・！！」

「ふうーん」

興味なさそうな声がきこえる

「そいつどこにいの？どんな顔？」

男は懷から写真を取り出し 里田がよくいく飲み屋を教えた

「さーて仕事すつかなー」

殺し屋キラー

人を殺し依頼主にみせ金を受け取る シュミと自分で言っている

第一章

ム
ウ
ー
ウ

里田が見上げた先には仮面をかぶつて 黒い服を着ている男がいた

男はこちらへとんできた

高層ビルの上から跳んできた・・・
もう一度

高層ビルの上から……跳んできた

高層ビルだ！――高層ビルの上から跳んできたんだ！――自殺！？

[illegible]

見事に着地した！しかし男の足はまったく震えていない
 どういう体をしているのだ！？

黒い男の左目が光った

ビビビビ

身長 171.5 cm

West 70 cm

BCDがCO
FがC

腰から100cmは・・・

— — — — —

この情報を元に死体作成・・・

ビビビビッビビビビビビ

男の右手から光が出た

そこには里田の死体があった・・・

「俺の死体!!??」

ザッ!

手!? 暗くてよくわからないが五本の棒のついてるもの
がかおに近づいてくる

おそらく手だ

手が顔についた時

バチバチと火花をちらして体がビリビリと破けていく

痛みはない・・・

ただただ自身のからだが破けているのを眺めているだけだった

ビチビチビチバチッバチッビー!

『うわああああああああああああああああああああああ
あああああ!!!!』

黒い男は言った

「俺は殺し屋キラーと呼ばれている、でも実際には人を殺していない
んだ

死体のダミーを依頼主に見せて金を受け取るっていうのがおれの手
口さ」

「んで、お前が生きてるってばれたら厄介だろ? だから隠すんだ、
おれの作った理想郷へ」

「ムウーウヘ!!!!!!」

ブオッ・・・!!

光が飛び散るとともに

丸い、広場のようなところについた

城のようなものがあり 噴水もある

・・・デジャヴュ・・・

どこかでみたことがあるような感覚だ

「あーここに来たやつはみんな既視感があるみたいなんだよ」

「よくわかんねーけどなあ」

「！そうだ！！なんなんだよここ！？」

「ここ？あームウーウっつーところだよムー大陸ってしってるだろそれから名前とった

おれに死体ダミーを作られたやつらはみーんなここにいるんだよ」

「はっ！？いみわかんねーよ！？なんでこんなところにいなきやいけねーんだよ」

「はあー・・・説明だるい！！！」

「お前らが生きてるってばれたら厄介だからだよ！！！」

「んじゃ死体ダミー見せて金もらってくるから！ちよつとまってるよあー！」

「ちよつ・・・おっ・・・」

「・・・っ！」

・・・

バタッ

「どうぞ！これくらい痛めつけたけどコレでどうだい？」

「ああ・・・こいつだ・・・こいつを殺してほしかったんだ！ありがとう・・・」

「ん」

「ん？」「ん」「ん・・・」

「ああ！金ですね！」

バタッ！

男は大量の金が入ったキャッシュケースを出した

男は依頼主から金を受け取り光を出しながら消えてった

ジリジリビッ・・・ビッ

・・・

「あつ……！おめ……！……！おれはこれからどうすればいいんだよ！」
「あーあーうるせーなー　だ！か！ら！ここで……！！おまえは暮らすんだよ！」

「な！ん！で！」

「こっちが何だよ！何で理解できないんだよ！」

「おまえはあつちの世界で死んだことにしたの！！！！だーかーらー！！！！おまえをあつちの世界においてつたら おまえが見つかって、おれがペテン師ってことばれちゃうだろ？」

「わかりましたか？」

「じこちゅー・・・」

「なんか言った？」

「自己中心的!!!!!!!!!!」っていったんだよ!!」

「うっせー！」

「あつ！」

「ちよつと一緒に来てくれ……付け根が痛む……」

「何でオレがこんな目にあわなきゃいけないんだよ」

なんやかんやいいながら里田は男へ付いていった

「なあお前キラーって言うけどさ本名なの？」

「ん、ああすぐにわかるよ」

?

「ついたぞ……このオンボロアパートだ」

「……周りは噴水とかあってきれいなのにここだけ汚いな……」

「建物とか黒いだろ？これさ、でかいガスバーナー使ったりしてる女がいるんだよ」

「そいつが黒焦げにしちやってんの」

「怖いな」

「ああ、怖い」

ガチャンッ！！！！

「おー美央！！付け根が痛むから見てくれよ！！」

美人がそこにすわっていた

真っ黒な髪の毛が肩までいつていて

フードのついた服の上から工場の作業服を着ている

童顔で赤い頬をしていて大きな目

里田のタイプであつた

「んー・・・また痛くなつたのどこ？みせてみて」

美央が立つた

「うあつ！？」

里田はおもわず叫んだ

「へっ？」

口を大きくしてばかーんとしている美央

「フードの上に作業服はわかるぞ・・・わかるぞ・・・」

「ミニスカにニーソックスっておまああああつ！?!?!?!?!?」

萌えー！ー！

「変態めが・・・」

鋭いキラーの声

「おまえにニーソックスのよさがわからないか！ 絶対領域の黄金

比を守ってるじゃないかこの美央って子！！！

ちなみに黄金比は4：1：2．5 だ！！！！」

「いやー実にはいい絶対領域だ」

「ジロジロ見ないで気持ち悪いから」

「え・・・」

「もう一回言うね ジロジロ見ないで気持ち悪いから」

「気持ち悪い・・・キモ・・・キモチ・・・ガーン」

キラーはため息をついた

「おい美央んなことより見てくれよ」

「あつごめん えつとお・・・どこ？」

「右の肩だよ」

「ちよつとみせてみてー」

キラーは服を脱いだ
そこには3つの縫い線がはいっていた

美央の手が動きナイフのようなものを取り糸を出したそして注射器をだし

とても複雑な作業をしている

キラーのからだを縫っているようにもみえただ切断してるようにも見える

「医学方面に特化していない自分にはよくわからねー 何やってんだこれ」

「んあ？医学方面に特化してもわかんねーよこれ 神様からの天罰だから」

「はあ？」

「よし！オツケー！ちょっと動かしてみてよ！！」

キラーは腕をぶんぶんふった

「おお 痛みが消えた、ありがとう！ また痛くなったらくるよ！じゃっ」

「あつ ちょっとまって 骨と筋肉のチェックするからそこに寝て」「んあー」

下には大量のパイプのようなものとSDカードのようなものが大量にある

機械と聞いて頭に思い浮かべられるようなものだ

そこには平らな板がありそのうえに大きな板がおいてある

キラーは板と板の間に横になった

「ちょっとこっからは見ちゃだめね」

美央は里田の目を手で覆った

「えっ？」

「すこしグロテスクだから」

びしっべちよつぶっ べちよべちようぶっ！

「ねえ 何でニーソックスなんかすきなの？」

「俺はこの世の美だと思ってる、男はたいていニーソックス大好きだよ」

「ふーん 生人^{きと}はじろじろみてこないのに・・・」

「はい！？なんかいった？」

「なにもいって『お楽しみ中わーい』が、終わったんで帰っていい？』
美央が話しているのに男が叫んだ

「ちよつとまってすぐに結果出るから」

「あーいーよいーよ、結果は後でメール送ってきてくれよ」

「んじゃっ いくぞ里田」

「わかった じゃーあとでメール送るね」

「そろそろ目隠しやめてくれない？」

「あっごめん」

「あまり体いたためちやだめよ生人^{きと}」

「おうっ じゃあな！」

バタアンツ

「ふーん・・・ニーソックスって・・・萌えるんだあ・・・」

「！何考えてるんだ・・・あたし」

「おまえキトっていうの？」

「ん、あー そうだけど？ だからさっきいったろ？すぐわかるって」

「あいつおれのこと生人ってよぶからさ」

「おあついねー」

「たしかに暑いな」

「そっちじゃなくて」

「？」

「それにしてもお前のその体どうしたんだよ・・・」

「縫い目ばかりじゃねーか」

「天罰だよ」

「天罰？」

「神様がさ おれに与えた天罰 『おまえのような人間には天罰が必要だっ』て！」

「だからおれは今人を殺さない殺し屋やってんだ」

「え？」

「いや・・・言い過ぎた なんでもねー」

「気になるだろが！！！」

「うつせえな！なんでもねーつつてんだろ！」

「いや気になるって！」

「うー！さ！い」

「いずれかわかるんじゃない？」

「いずれかっていつだよ」

「しらね」

「なんだよー おしえろよー」

謎の男達

〔第2章〕

謎の男達

「おまえに教える義理はないよ」

「ちえっ！ケチ」

「ゴソ・・・ゴソ・・・ゴソ・・・」

「いくぞおおおおおおおおおお！！！！　　うおおおおおお
おお！」

「なんだなんだ・・・どうしたんだ　誰か叫んでるぞ　キラー」
だだだだ！

路地から大量の人がこちらにむかつてはしってくる

「覚悟おおおおおおおおおおおお！！！！」

グサツ・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

バン！！！！

飛び散る資料　跳ね上がるキーボード

「筋萎縮！？うそ！」

「アイツ・・・筋萎縮になる理由なんてないのに・・・やっぱり
天罰が・・・」

「早くいかなきゃ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「うつ・・・」

「キラ・・・」

大量の男達に囲まれている中

目の前でナイフで刺されている　キラが居た。

キラは刺される前に震えていた・・・

そして今も震えている

ゆっくり拳を振り上げたキラは　ナイフを刺したまま体を捻る

刺した人はすこし後ずさりする

ブオッ！！！！

拳がまつすぐ　捻りながら前に進むその拳は　キラを刺した奴へ
当たる。

そいつは拳の力で飛ばされた

ズ！！！！キ！！！！

「！！」

「うつ・・・」

「キラ・・・どうした体が震えてるぞ・・・」

「筋肉が・・・」

「え？」　「筋肉が・・・」

「筋肉が言うことを聞かねええええ！！　うあああああああああ
ああああああああああ！！！！」

キラの叫びで里田は少し後ずさりする
ダッダッダ　左から足音がする

里田は左をみた

そこには 拳を突き出し 走ってくる男が居た
男は身を乗り出し飛び出してきた
ガッ！

里田は体重を左に移動し 右手で飛んでくる腕をつかみ 左手で男の下半身を抱いた

そして 体重を右に移動し 右手をいきおいよく 下におろし 左手を勢いよく上に上げ 投げ飛ばした

「いつきなりなぐりかかってくるってどういう事だボ・・・」
言い終わる前に新手の男がやって来た

男は手を地面におき 下半身を里田に伸ばして 蹴りを入れようとしてきた

里田は手を上に上げながら後ろに飛んだ

そして落ちそうな下半身を足で蹴り上げ、上に上げた両手で下半身をたたき落とした。

「ボケエエエエエエエエエエエエエエエエ！」

里田は脅威の身体能力で一気に二人を軽々と相手にした

が

里田は自分の背後に人がいるのにきがついた

里田の振り向く暇もなく 里田はやられた・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ダッダッダッ 「速く！！速くしなきゃ！ 急がなきゃ！」

美央が走ってくる

ビルの上にそれをのぞく髪の毛の長い男が立っていた。

「・・・・・・・・・・！」

美央が駆けつけた時に見たモノは・・・里田とキラの血まみれになつて倒れている姿だった

「生人！！」

「あ？」

大量の男の中の一人が振り向いた

「女がこつちくるんじゃねーよ！！」

男は美央に近づき殴りかかってきた、その拳は美央にヒットした
よるめく美央はにやけて言った

「いったいな・・・もう」

男は眉間に皺を寄せた「言つとくけど・・・女でも手加減は」
「一丁・・・」

美央は右脚で地面を蹴り男の横に飛んだ 左脚で着地し 曲げた右
脚を回し 力を入れ 男の顔を蹴った！

「逝きますか！！」

ヒットしたと同時に曲げた足を伸ばして 男の肩に踵を落とした
そして再び 男を蹴り飛ばした

ガシッ

飛んでいった男の頭をつかんだ男が居た

がっちりした体型で 親父シャツを着こなし スキンヘッドに太い
眉毛の男だ

「ばかやろう」

男は頭をつかんだまま 腕を後ろにおもつきし引き 顔を地面にたたきつけた

「女に攻撃してんじゃねーよ！！」

男はたたきつけた血だらけのかおを持ち上げ 放り投げた

「！！」 「女に攻撃しちゃいけないってのは……いい心構えじゃない……」

男はこちらを睨んだ「攻撃はしねえけど 動けねえようにする事はできるんだぜ」

「やっぱ心構え悪いね君たち……」

「おい持ってきたロープでそいつ縛っとけ」

「押忍！」

男達はロープを美央に縛り付けた

「あんた達……なにが望み？」

縛られた状態で美央が聞いた

ガッ
チりした男が叫んだ「ムウーウからの解放だ！！！！！！！！」

美央は下を向きしゃべらなかつた……。「……………」

沈黙が流れた

次の瞬間 美央が頭を上げ 叫んだ

「バアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアア力!!!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8247y/>

生かし屋キラー

2011年11月24日19時49分発行